

近世期の十牛図に関する韻文の諸相

伊藤 達 氏

はじめに

本紀要第二十一号に「十牛図をめぐる和歌」と題し、五山版『五味禅』『四部録』収録の「十牛図」には見えなかつた近世期の版本に付される和歌二十首（各図二首）について、小序・廓庵の頌及び石鼓夷と壞衲璉による二首の和韻との比較を試み、近世初期の堂上歌人十人による「十牛図」の各図を詠じた十首の詠作について触れた。続いて第二十二号に「月坡道印と小澤蘆庵の「十牛図」と題し、曹洞宗の僧月坡道印（二六三七～一七二六）による『うしかひ草』（寛文八年序・同九年刊）と小澤蘆庵（二七三～一八〇二）による版本掲載歌に対する批評及び歌意不審の歌について新たに詠作を試みていることを見た。『うしかひ草』は仮名草子の一書であり、和文と和歌から構成され、完全に和風化されていることに特質がある。貧農の子が父から譲り受けた牛を無くしてしまうことを物語の発端とし、その牛を探し求め、飼ひ馴らし、帰郷、大悟し市井に赴くまでを描く。内容は廓庵「十牛図」の趣意によるものの、二章を新たに設け全十二章から成り、各三章を四季に配当し、文章は当該季節の描写に多くを充てな

がら人物の心境を語る。「十牛図」の趣意に基づきつつも、仏教の用語を用いずに、その趣意を和文・和歌の国風のスタイルを以って表現しようとしたところに前後の作品にない独創がある。蘆庵のそれは自筆本家集『六帖詠藻』(静嘉堂文庫蔵)に記されており、版本掲載歌を批評し、ときに自詠を付しており、近世期の歌人による版本掲載歌全般に対する唯一の批評として貴重である。その批評には蘆庵の歌論を補完する言葉もあり、蘆庵の和歌に対する姿勢が垣間見られることを指摘した。本稿は右記の拙稿に続くものであるが、前二号において触れることのできなかった近世期の「十牛図」に関する詩歌を取り上げることが目的とする。

一、叢書類収録の「十牛図」による詠歌

「十牛図」に関する作品は当然のこと漢詩を中心に行われてきた。寛永六年版本に初めて各図二首の和歌が付されているのが和様化の始まりである。但し、川瀬一馬氏によつて大東急記念文庫所蔵の室町中期から末期の古写本『四部録』所収の「十牛図」に各図一首の和歌が挿絵の上に添えられていることの報告がなされている。¹⁾一部語句に異同の存する歌はあるものの、この内八首が版本に取り入れられている。²⁾川瀬氏の報告により「十牛図」による詠歌は室町中期から末期にまで遡ることが判明したが、作者未詳であり、どのような経緯で八首が版本に導入されたのかについては不明である。一方、五山の僧侶による詩作は一山二寧(二四七〜三二七)の「和十牛圖并序」(『一山國師妙慈弘濟大師語』南北朝期刊)、竜湫周沢(二三〇八〜三三八)の「十牛」(『隨得集』)が存しており、近世期には黄檗宗の高泉性激に全図を賦した作がある。室町期に臨濟宗を中心に広まった「十牛図」ではあるが、漢詩及び和歌の詠作は多くはない。和歌において作者名が明らかな全図に対する詠歌は前記の近世初期堂上歌人十人

による詠作（寛文五年詠）が最古である。以降は「十牛図」全図に対する作者名記載の詠作はなく、前述の蘆庵の版本掲載歌の批評及び一部の図に自詠が存するのみである³。が、作者未詳の「十牛図」による詠歌は一種が叢書類に存する。一種は『歌書』（内閣文庫蔵）などの和歌の叢書類に収録されるものであり、四種の写本に収録されている。二種は『百鶴集』収録のものであり、当該本のみ⁴に存する詠歌である。両種ともに和歌を中心にした叢書であるが、その中に二種の「十牛図」による詠歌が作者未詳として収録されている。本項ではまず『歌書』以下に収録される詠歌を見る。

始めに二種目の諸本を掲出する。

「十牛歌」（『歌書』写一冊。天和二年写。国立公文書館内閣文庫蔵。請求記号、201-390）

「十牛之圖哥」（『待需抄』写一冊〈全二七冊〉。宮内庁書陵部蔵。請求記号、266・4）

「十牛歌」（『先代御便覧』写一冊〈全二八冊〉。宮内庁書陵部蔵。請求記号、265・1113）

「十牛之圖歌」（『数量和歌』写一冊。嘉永七年写。歴博高松宮家伝来禁裏本蔵。請求記号、H600-1475）

全て写本。『歌書』の書写年代は天和二年（六八二）であり、当該詠歌は近世前期に存していた。『待需抄』『先代御便覧』は近世中期の書写だが、四写本ともに和歌に関する叢書であり、その中の一種の詠歌として収録される。当該詠歌を『歌書』によつて翻字するが、他の写本との主な異同は○において示す⁴。なお四写本ともに「尋牛」以下の題目は記載されていない。

一

名のみしてまたみぬ牛もつなぐべきことぞ道しるべなれ

（一―第一〈待需抄・数量和歌〉以下同。）

「尋牛」の歌。名ばかりでいまだ見えない牛をつなごうとする素心が牛を探し出す道標であると詠む。「牛もつなぐべき」の詞は壞衲蓮の和韻の転句「手把鼻頭同歸客 手に鼻頭を把つて同じく帰る客」と通底する。版本掲載歌は、

尋行深山の牛は見えずして（たゞ）空蟬の声のミぞする

たづね入牛こそミえね夏山の梢に蟬の声ばかりして⁽⁵⁾

とあり、夏の茫洋とした山に蟬の声だけが聞こえるとき、牛のいるであろう山の情景を詠むが、当該歌は牛を探し求める牧人の素心を趣向とする。

二

ふみ過し跡かたたづねもとむれば猶草ふかき太山べの里

「見跡」の歌。牛の踏み過ぎた跡はないかと探し求めるが、依然として草の生い茂る深山の里を彷徨していると詠む。牛の足跡・草深い山奥のイメージは廓庵の頌、

水邊林下跡偏多 水辺の林下 跡偏えに多し

芳草離披見也麼 芳草離披たり 見るや也またいなや

縦是深山更深處 縦い是れ深山の更に深き処なるも

遼天鼻孔怎藏他 遼天たる鼻孔 怎ぞ他を蔵さん

と通底する。当該句は小序に經典を読み教導により法門の入り口にさしかかったところであり、本格的な修行の手がかりを得た段階とされる。版本掲載歌の二首目は「おぼつかな心づくしにたづぬれば行衆もしらぬうしのあとかな」と牛の姿は未だ発見できていないがその足跡を目にしたことを詠み、下句は二首ともに牛そのものを見つけ出せず思いあぐねる心境を表している。前記の堂上歌人の歌は、

行急猶まよはさうしや遠からぬ法の教のあとゝみながら⁽⁶⁾（見跡牛・時量〔平松〕）

と詠まれる。牛の足跡を仏法に喩えて詠じており、当該歌及び版本掲載歌よりも釈教性が強く感じられる。

三

一すぢにもとめんとおもふ心よりほのかに牛の影ハ見えける

（もとめんと―もとむと〈待需抄・先代御便覧〉）

「見牛」の歌。一途に牛を希求する心によりかすかに牛の姿を捉えた。「牛の影」の詞は石鼓夷の和韻の起句に「識得形容認得聲（形容を識得し声を認得す）」とある。「形容」（牛の姿）と通底する。版本掲載歌の一首目は趣意・措辞ともに廓庵の頌によることを前々号において指摘したが、一首目は「吼けるををしるべにしつゝあらうしのかげミるほどにたづね来にけり」とある。牛の姿と咆哮を一首に詠み込むが、当該歌は上句の一途な牛への思いに比重がある。

四

^{か繁}こふほどもまだあら牛のつなひきにえざるさきよりまどひぬる哉

（こふ―かふ〈待需抄・数量和歌〉）

「得牛」の歌。飼い馴らそうとして綱を引くものの荒牛は抗い従わず、自己のものにできずに途方にくれるさまを詠む。「あら牛（荒牛）」「つなひき（綱引き）」の詞によつて未だ容易には馴致しない牛の抵抗を表し、「まどひぬる哉（惑ひぬる哉）」で牧人の心境を表出する。版本掲載歌の二首目は「とり得てもなにかとおもふあらうしの縄引ほどに心つよさよ」とあり、「あらうし」「縄引」が当該歌と一致し、趣向も同じくする。小序には「……頑心尚勇、野性猶存、欲得純和、必加鞭撻（頑心尚お勇み、野性猶お存す、純和を得んと欲せば、必ず鞭撻を加えよ）」とあり、当該図は牛と牧人の葛藤を主題とする。当該歌の上句は野性を内在させる荒牛、下句では牧人の心境が表わされる。

かひなれて静にみゆる牛なれどはなさじとするつなはくるしき

「牧牛」の歌。漸く牧人に馴化し静かになつた牛ではあるが、まだ気を緩めることはできず、放すまいとするその綱が苦しいと詠む。小序には「……由覺故以成真、在迷故而爲妄、不唯由境有、唯自心生、鼻索牢牽、不容擬議（覺りに由るが故に以つて真と成る、迷いに在るが故に妄と爲す、唯だ境に由ること有るのみにあらず、唯だ自心より生ず、鼻索牢く牽いて、擬議を容れず）」とあり、未だ修行の途次であり迷いがあるために迷妄が現われ、ためらわず牛の綱を引き締めよとする。二首の和韻は牛が牧人に馴化し奔放な行いをしなくなったことを詠じるが、廓庵の頌の起句・承句には「鞭索時時不離身 恐伊縱步入埃塵（鞭索時時身を離れず 恐らくは伊が歩を縦にして埃塵に入らんことを）」とあり、牛に対して未だ警戒せよとする。版本掲載歌の二三首は石鼓夷と壞衲璉の和韻に趣向を同じくするが、当該歌は廓庵の頌と起句・承句に通底するものといえよう。

わが牛とのりえて笛になくさまハおもほえずしも道やまとハん

「騎牛帰家」の歌。牛を自身のものとし、背に乗る牧人の吹く笛に合わせて牛が声を上げ、もう迷いの道に入ることはないと詠む。「のり」に「乗り」と「法」を掛ける。「笛」の詞は小序に「吹兒童之野曲（兒童の野曲を吹く）」とあり、頌の起句・承句に「騎牛迤邐欲還家 羌笛聲聲送晚霞（牛に騎つて迤邐として家に還らんと欲す 羌笛声声晚霞を送る）」とある。石鼓夷の和韻の承句にも「旋吹桐角出煙霞（旋もすれば桐角を吹いて煙霞を出つ）」と笛を吹くという語句がある。五山版・近世開版の当該図には必ず牛の背に乗り笛を吹く牧人が描かれており、その意匠によつたかとも思われるが、版本掲載歌及び堂上歌人の詠歌にも笛は詠まれておらず、頌と石鼓夷の和韻に基づ

くものであろう。⁽⁸⁾

七

かひ馴しうしきへはなつ宿なればさし入月もくまなかりける^り

(くまなかりける―くまなかりけり〈待霈抄・数量和歌〉)

「忘牛存人」(到家忘牛)の歌。苦勞して捕え飼ひ馴らした牛を解き放ち、おのが家には月光が隅々まで照らし出している、と詠む。当該図ではすでに牛の存在はなくなり、それまで仮象として指定されていた牛という自己の本心と一如となった段階である。小序には法―真理―が二つあるわけではなく、牛を一時のテーマにしたことが述べられるが、本歌の「さし入月」という措辞は頌と和韻一首にはない。小序後半には「……如金出鑛、似月離雲、一道寒光、威音劫外(金の鉱より出るが如く、月の雲を離るるに似たり、一道の寒光、威音劫外)」とあり、比喩としての月が雲から抜け出ることと、「一筋の「寒光」(月光)が記されている。当該図の挿絵を見ると、一部の五山版、近世期開版のものには山上に月が描かれており、漸く牛との関係が終わり安らいだ心境の牧人の姿を写すが、そのイメージと一致する。当該歌が挿絵を形象したかはともかく、月のイメージは文字情報としては小序と通底する。

八

うしとみし我身も月もむかしにて夢さめぬれば同じ半天

「人牛俱忘」の歌。当該図は前図の牛を忘却したことに続き自己もまた滅し、悟りの境位をも無にした段階とされる。「憂し」と認識していた自己も法の象徴の月も今はなく、夢から覚めてみると、昨日までの空と同じであるとする。挿絵は五山版・近世開版ともに円相は空白である。趣意は廓庵の頃の起句・承句の「鞭索人牛盡屬空 碧天遼潤信難通(鞭索人牛尽く空に属す 碧天遼潤として信通じ難し)」と通底する。

九

故郷へかへりきたれば人もなくむめかほりぬる明ぼのゝそら

「返本還源」の歌。当該図は本源に還り万物をあるがままに観る境地。家郷には人の姿はなく、ただ暁の空に梅の香りが馥郁と漂うようすを詠む。廓庵の頌、壞衲璉の和韻に「花」とはあるが、ここは五山版以来の挿絵に水辺に咲く梅の花が描かれており、梅の語は挿絵に想を得たものかと思われる。また梅は禪語と関係が深く万物の本源に還るといふ当該図の趣意を詠むのに相応するものであろう。ただし、第一・二句の家郷へ帰り着くという措辞は「忘牛存人」に適するように思われるが、本源を故郷に見立てて下句で人為を超えた自然のあるがままの実相を表しているともいえるよう。

十

梅かほる軒端の風も吹たえて月夜もやみもしらぬむささび

(吹たえて—吹さえて〈待霈抄・数量和歌〉)

「入麴垂手」の歌。前掲歌に続き梅が詠まれている。下句は月明かりの夜も暗闇の夜にも関わらないむささびを詠じるが難解である。むささびが和歌に詠まれることは少なく、萬葉集に三首、中世期の類題集、私家集に散見される程度である。萬葉歌では二首は獵師・人に捕獲されるむささび、一首は鳥を捕えようと梢でひたすら機会を窺うむささびのように恋の思いに瘦せてゆく作者の姿が比喩的に詠まれている。中世期のそれは、夜更けに鳴き声を立てるさまを詠む歌が多く、暗闇と鳴き声の組み合わせで詠まれる。本歌はおそらく巢に籠るむささびのように、明暗のいずれにも与からない境地を表すものと思われる。和歌から視点の詩に移してみると、『和漢朗詠集』に「夜鶴眼驚松月苦 暁颺飛落峽煙寒(夜の鶴眼り驚きて松月苦めり、暁の颺飛ひ落ちて峽煙寒し)。(『雑山』、『新撰朗詠集』

に「四禅夜闌 曉颺飛而山月曙 三昧秋暮 霜猿叫而峽煙深（四禅夜闌けぬ 曉颺飛んで山月曙けぬ 三昧秋暮れぬ 霜猿叫んで峽煙深し）」（雑「山寺」・金峰山願文 江都督）とあるが、二首ともに暁時にむささびが飛ぶようすを詠む。『新撰朗詠集』の語句に「四禅」とあるが、これは初期仏教に説かれる禅定のことであり無念無想の状態を言う。柳澤一郎氏の解釈のように僧が夜瞑想の修行をしている情景を詠じている。¹³ 当該歌のようにむささびが禅や宗教的境位を表した例はなく、この語は唐突の感もあるが、前歌に続いて詠まれている梅の香りを誘う風も吹き止み、妄動することのない境地を詠じたと捉えたい。

なお「入鴈垂手」は巷間に赴き人々を教化し済度するという趣意である。小序・頌、二首の和韻には異形の姿をした人物の相が詠われているが、歌ではそのことは詠まれていない。前記堂上歌人の歌は「心なきをのが心のまゝとなる市にいづるも家に帰るも」（入鴈垂「手」・道晃）とあり、自由遊戯の境涯を表現し、当該図の人物を主体にして詠む。¹⁴ 後に紹介するもう一種の叢書に収められる歌も人物に焦点を当てており、版本掲載歌の一首目、古写本『四部録』（大東急記念文庫蔵）の歌も人物の境涯を詠む。¹⁵ 当該歌は他の歌の趣向と相違し自然の景物に託して詠まれていることを特徴とする。

以上全十首を検討したが、大よそは「十牛図」各図の趣向に沿って詠まれており、頌・和韻と相通じるが、第十図はそれらから離れて作者の独自の感慨が詠出されているものと思われる。

次に『百鶴集』に収録される「十牛圖歌」による詠歌について見る。『百鶴集』（写本・全三冊。国立公文書館内閣文庫蔵。請求記号、Z176）は江戸後期の写本と思われる、和歌・有職故実・漢籍の注解・仏教関係の叢書であり、第十四冊に当該詠歌が収録される。¹⁶ 今回の調査では内閣文庫所蔵の当該本以外の他書には見出し得なかつた。参照すべき他本がないため一括して掲出する。

十牛圖歌

尋牛第一

キクバカリオモヒタチデ、山へ入りヨモノ路ナキアトヲタツネン

見跡第二

草フカクワケ入ルナカニ跡ヲ見テコレヤ始ノ牛ノアシアト

見牛第三

春クレバヨモノ草木モモエ出テイヅクナルラムナニトワクベキ

得牛第四

此間タツネシ牛ニ今アヒテトルモトラレズヒクモヒカレズ

牧牛第五

養へバハヤナレソメシ此牛ノヨロヅノワザニヌシトナルカナ

騎牛歸家第六

ヒロキ野ニ牛ニマカセテノルヌシノ行モトマルモシサイナケレバ

忘牛存人第七

山里ニ独リカヨハ^{ノヒトモカ}ンアバラヤニオモハズシラズイネムリゾスル

人牛俱忘第八

自他モナク是非ノ形ヲワケザレバタミアリアケノ月ニムカヒテ

返本還源第九

花ハ咲キ柳ハ緑トナリヌレバモトノ古里カハラザリケリ

入麿垂手第十

市人ニアヒモロトモニタハブレテ古ヘ今ノ笑ヲゾスル

詞の様相では「シサイ（仔細）」（騎牛帰家第七）、「自他」「是非」（人牛俱忘第八）という漢語を用いていることに注目される。版本掲載歌及び『うしかひ草』、蘆庵の自詠、前掲の歌には当然漢語は詠まれておらず、当該二箇の趣意を通常の歌では詠まれることのない漢語を用い直截に当該箇の趣意を詠み表そうとしている。「自他」「是非」も經典に頻出する語であり、仏教由来の語を用いる。また「イネムリ」（忘牛存人第七）という俗語、「オモヒタチデ、」（尋牛第二）も本来は「オモヒタチイデ、」とあるべきであり、和歌の通常の体から離れて詠まれており、道歌風の印象を受けるものもある。

「尋牛第一」は牧人が牛を探し出そうとする場面だが、初句は「キクバカリ（聞クバカリ）」とある。前掲の「十牛歌」（『歌書』）は初句「名のみして」とあつたように牛という名称は存するものの未だ目にしていない実体としての牛を求めることを詠じていたが、当該歌は耳にしているのみの「牛」と詠む。版本掲載歌以下、当該箇の歌は牛を詠み込んでいるが本歌には牛は詠まれておらず、そのためどこにいいのか判然としない不在としての牛が強調される。

「見跡第二」の歌は草深い中を分け入り、はじめて牛の足跡を発見したことを詠む。草深いところで牛の足跡を発見する趣向は廓庵の頃の起句・承句「水邊林下跡偏多 芳草離披見也麼（水辺林下跡偏えに多し 芳草離披たり見るや也たいなや）」と通じる。版本掲載歌にはこのイメージはなく、一首目は「深山」が詠まれる。前掲叢書の歌も下句に「猶草ふかき太山べの里」とあつた。当該歌は廓庵の頃と通じる。

「見牛第三」の歌は春になりあたりの草木が芽吹いており、牛はどこにいいのか分らず判別するすべもない、と

詠む。春の情景を詠むのは、廓庵の頃の起句・承句「黄鸝枝上一聲聲 日暖風和岸柳青（黄鸝枝上一声声 日暖かに風和して岸柳青し）」によるものと思われる。一首の和韻に春を思わせる語句はない。他の歌と相違する点は版本掲載歌以下には牛の姿を見出したことを詠むが、当該歌は未だ牛を目にしない段階として詠まれている点である。この点は当該図の趣意と相反する。

「得牛第四」の歌において、「今アヒテ」とはじめて牛を見出したことを詠む。小序の「久埋郊外、今日逢渠（久しく郊外に埋もれて、今日渠に逢う）」によるものかと思われるが、下句では牛を我が物にするために格闘することが詠まれる。他の詠歌も綱を強く引き牛を馴致させることに精神を費やすことが詠じられている。例えば堂上歌人の詠歌では、「たづねわびぬあはれ心をつくしうしひきたる綱の心ゆるすな」（得牛・資清〔裏松〕）とあり、「つくしうし（筑紫牛）」に心を「尽くし」の意を言い掛け、油断するなど詠む。当該歌では下句の対語によつて牛と格闘する牧人の姿を動的に表現している。

「牧牛第五」の歌は完全に牛を飼い馴らしたことを下句に詠み表す。一方、前掲叢書の歌は小序・廓庵の頃と通じており、牛に対して依然として警戒せよとする趣意と一致していた。ここは石鼓夷の転句・結句の「不曾犯著人苗稼 来往空勞背上人（曾て人の苗稼を犯著せず 来往空しく背上の人を勞す）」と通底するように思われる。なお版本掲載歌も同じく従順な牛のありようを詠む。

「騎牛帰家第六」の歌は悠々と牛の歩みに身を任せ何をするにも妨げのない境涯を詠む。小序・頌、石鼓夷の和韻には牧人が笛を吹く姿を詠むが、当該歌は笛を吹く姿は詠まれていない。版本掲載歌の一首目は小序の「唱樵子之村歌（樵子の村歌を唱う）」と通じており、「うそぶき」という詞を詠むが笛は詠まれておらず、二首目の歌も同様に笛を表す詞はない。堂上歌人の歌も苦楽を去つた心境で家路につくさまを詠じており、前掲叢書収録の歌は

笛に合わせて牛の鳴き声が詠まれていた。本歌は小序以下の具体的な詩句によらず、当該図の趣意を詠む。なお挿絵は五山版・近世開版ともに牧人が牛に乗り、横笛を吹く姿が描かれる。下句の「シサイ(仔細)」の語は前述したように漢語であり、通常の歌のありようからは逸脱する詠法である。当該図において牛と一体となり清適の境位を得たことを表しているのだろうが、それを和語ではなく漢語によつて直截に表現しようとする。

「忘牛存人第七」の歌は初句・第二句に注記があるが、「山里ノヒトモ」とする異本が存したことも想定できるが、今回の調査では当該本以外見出せず、本歌を「山里ニ独リカヨハン」「山里にただ独り通う」として解釈する。山里のあばら家で何かを思量することも存知することもなく寝人つてしまふさまを詠む。「アバラヤ」「イネムリ」の詞は廓庵の頌によるものと思われる。一種の趣向も通底すると思われるので左に頌を掲出する。

騎牛已得到家山 牛に騎つて已に家山に到ることを得たり

牛也空夸人也閑 牛も也た空じ人も也た閑かなり

紅日三竿猶作夢 紅日三竿 猶お夢を作す

鞭繩空頓草堂間 鞭繩空しく頓さしおく草堂の間

家郷に帰り着き、牛の存在を忘れ人も静寂、朝日が昇つてもまだ夢の中、以前用いた鞭と繩は必要なくなり小屋に捨て置かれている、と詠じる。一首の和韻には眠るという措辞はなく、当該歌は廓庵の頌と趣向が通底する。

「人牛俱忘第八」は牛とともに人の存在も消え、本来は空であることを観じた段階だが、歌は主・客もなく是・非も問題とせず、ただ自然の実相である有明月に対していることを詠む。下句の趣向は当該図の小序・頌、二首の和韻になく、当該詠作者の独創と思われるが、牛に続き人の存在も忘却し、空の境位を詠じるにあたり、夜明けの空に残る有明月に託して表現する。なお第六図に漢語が用いられていたが、当該歌においては「自他」「是非」の二種

の漢語を用いる。漢語を用いるのはおそらく和語化するよりもその意味が明解になることを意図してのことと思われるが、その分和歌的情趣を損しているともいえるだろう。

「返本還源第九」の上句は、花は咲き柳の枝は緑に色づいたと詠むが、柳の語は当該図の小序以下にない。花の語は廓庵の頌の結句に「水自茫茫花自紅（水は自ら茫茫花は自ら紅なり）」、壞衲璉の結句「百鳥不啼花亂紅（百鳥も啼かず花乱れて紅なり）」とあり、挿絵にも五山版以来、水辺に咲く梅の花が描かれている。前掲叢書の歌は梅花を詠じていたが、当該歌は花とする。柳の語は当該図になく、詠作者の独自の表現であるが、上句では花・柳という春のイメージを点描する。下句は不変の「古里」と詠むが、前掲叢書の歌には故郷の詞が詠まれており、故郷へ帰り着くと曙の空に梅の香りが漂うことを詠じていた。当該歌も春のイメージを表出し、花が咲き青々とした柳の垂れる光景に、当該図の趣意であるありのままの実相の世界―真理―に還ることが詠じられていると思われる。自然の光景にその趣意を託すことは二音の歌に共通している。

「入廓垂手第十」は衆生教化のために巷間に出て行くという趣意の図だが、歌には「市人ニアヒモロトモニ」とあり、題目の「入廓」―街に入る―ことが詠まれる。小序の「……提瓢入市、策杖還家、酒肆魚行、化令成仏（瓢を提げて市に入り、杖を策き家に還る、酒肆魚行、化して成仏せしむ）」とあるのに相当する。「タハブレテ」の措辞は小序以下には見出せないが、大悟し安心立命の境地を得た柔和な雰囲気詠み表すのであろう。下句の「古へ今ノ笑」は廓庵の頌の承句に「抹土塗灰笑滿腮（土を抹し灰を塗り笑い腮に満つ）」とあり、歌の「笑」と相通じる。「古へ今ノ笑」は何を意味するのは分かりづらいが、例えば拈華微笑の禅語が示すような、華を拈った釈尊の行為の意味を迦葉のみが微笑して応じたという笑いを想定できるのではないか。言語では解き明かせない禅の神髄を「笑」の中に込めているのではないかと思われる。

以上、二種の叢書類に収録される「十牛図」を基とした詠歌を検討した。「十牛図」は小序、頌、二種の和韻があり、各図の趣意がすでに言語化されているが、それを和の表現様式により再度言語化しようとする試みは、川瀬氏の報告する中世の『四部録』の古写本に十首現れているのが最もはやく、その内八首が寛永六年版『四部録』に収録され、同版に新たに十二首の歌を付し、各図二首、全二十首の形式になり、以後の各版にも踏襲されている。近世堂上歌人十人による詠作は「十牛図」に関する詠作において作者名のある初めてのものである。ここで検討した二種の叢書類は作者未詳のものであり、版本掲載歌に続く詠歌である。二種の詠歌は大よそは各図の趣意、小序以下の詩と趣向を同じくしていた。『歌書』以下に収録する「人麴垂手」の歌は当該図の趣向には沿っておらず、独自の表現を取っていたが、詠者なりの創意であろう。その他の歌は歌意も明らかであり、掛詞の修辞も一首を数えるのみであった。『百鶉集』の詠歌は漢語を用い直截にその趣意を表現しようとする姿勢が窺えた。本項において叢書類に収録される二種の詠歌について触れたが、古写本を含めると「十牛図」全図に対する詠歌は五種存することになる。歌の表現性からすると、やはり堂上歌人たちによる詠歌が最も堪能さを示しているが、他の四種の詠作も「十牛図」を和歌―和風化―によって表現しようとするその試みは貴重であると思われる。

一、高泉性激の「十牛頌」

本項においては近世期の「十牛図」による詩作について検討したい。中世期の「十牛図」に対する全図の詩作は、前記したように一山一寧、童湫周沢に見られた。近世期において全図を賦す詩作は高泉性激（二六三三―二六九五）に存する。同宗の開祖隱元隆琦にも十牛図に対する賛が一種残されているが、全図に対しては賦していない。¹⁸このこ

とは拙稿で触れたが、一寧以下の高僧によつて詩作が行われていること、禪の修行階梯を示し且つその神髓を示す当該図は容易には詩の題材にすることはできず、それらの境位を表現することは至難の業であると認識されていたと思われ⁽¹⁹⁾。

高泉は明の崇禎六年、福州福清県に生まれ、清の順治二年十三歳で父母を亡くしなしたことを機縁に出家、慧門如沛に師事し、順治十八年(寛文元年)に隱元の古稀を祝うため来朝、黄檗山に登り終生日本に留まった。第五代を承継したのは元禄五年である。詩文に優れ、詩文集『一滴』(四卷二冊。貞享四年跋)、『洗雲集』(二十二卷十一冊。元禄三年刊)があり、語録に『高泉禪師語録』(二十四卷八冊。貞享元年刊)などがある⁽²⁰⁾。高泉の作は上記語録に収められており、まず題詞を掲出する。

寛文六年春三月師黄檗に寓す、帝師大宗正統旨を奉げて師に勅して、十牛の頌を制し、御箋十幅を以て命じて、手づから書せしめ用ひて内苑に鎮す、師旨を承りて此を作りて上進す。(原漢文)

とある⁽²¹⁾。寛文六年(二六六六)は高泉三十四歳の年にあたる。「黄檗に遇す」とあるのは前年二本松藩主丹羽光重の招請により法雲院に赴くものの、共に来朝した暁堂が遷化したため当寺に戻ってきたことを指す。大宗正統は龍溪性潜(二六〇二〜二六七〇)のことであり、後水尾院の帰依を受けていた(大宗正統は院の勅号である)。院は性潜を介し「十牛頌」を高泉に制作させたとある。後水尾院は隱元以来黄檗山に帰依しており、その繋がりは深いものがあつた。『後水尾院御集』には『碧巖録』『無門関』などの公案集の言を詠じた歌十六首(新編国歌大観番号九七五〜九九〇)があり、院自身禅宗の教理に深い興味を寄せていたと思われる。当該頌は院の勅命という外在的要因によつて賦されたものだが、近世初期の黄檗僧が「十牛図」をどのように表現しようとしたのか、という興味深い問題を孕んでいる。紙幅の都合上、「尋牛」及び「騎牛帰家」以下について検討したい。

尋牛

山重重也水重重 山重重 也た水重重

路杳雲深望莫窮 路杳かに雲深くして望み窮り莫し

踏徧蒼苔覓轉遠 蒼苔を踏徧して覓むれば転た遠し

風前徒見野花紅 風前徒に見る 野花の紅なることを

起句・承句では山が幾重にも重なり川もまた同様、道は遙かて雲が深く立ち込める茫漠とした景を詠む。これは廓庵の頌の承句「水澗山遙路更深（水澗と山遙かにして路更に深し）」と通底する情景である。転句・結句では青々とした苔の上を隈なく探し求めようとすると、牛の痕跡はますます遠ざかり、赤い野草の花を空しく目にすると詠む。花という語は「十牛図」においては「返本還源」の廓庵の頌、壞衲璉の和韻に詠まれているが、当該図では頌二種の和韻に花を思わせる語句はない。それぞれの結句を見てみると、廓庵は秋のおくれ蟬の鳴き声を聞き、石鼓夷は収穫を喜ぶ歌を空しく歌い、壞衲璉は物思いに耽る様子を描く。牛を探し求める牧人の呆然とした心境を表現するが、高泉は野草の花を空しく見ることに託している。

騎牛帰家

滿天瑞氣映山河 滿天の瑞氣山河に映ず

信足還家樂若何 足に信せて家に還る樂しみ若何ん

横把一枝無孔笛 横に一枝の無孔笛を把つて

臨風吹出太平歌 風に臨んで太平の歌を吹き出す

空にはめでたくも神々しい気が満ちそれが自然の景に映る中を、牛の歩みに任せて家に帰る樂しみを無上のもの

とし、一本の「無孔笛」を取り出して、風に向かい太平の歌を吹くとする。牛を飼ひ馴らしもう逃がすことになつた牧人の境地を詠むが、「無孔笛」は『碧巖録』に見える語である。⁽²³⁾孔のない笛は音の鳴るはずはないが、ここではその笛に太平の歌―牛との格闘を終え一体となつた牧人の心境―を吹かせており、音の発することのない笛に限の調べを聞くという趣向はいかにも禅らしい表現をとる。

忘牛存人

雲歛天空絶點塵

雲歛まり天空点塵を絶す

光吞羣象月輪新

光群象を吞んで月輪新なり

休言眼底渾無物

言うことを休めよ 眼底渾て物無し

大地元來屬一人

大地元來一人に属す

牛の存在を忘れ牧人(主)と牛(客)が本来一如であつたことを趣意とする図だが、雲も収まり空には一点の汚れもなく、月光は隈なく照らすとし、もはや言葉を用いることもなく、眼に映るものは何もなく、元來大地とは一体であつたと詠む。特に転句・結句は言葉を発することなく見るべきものもなく、大地と一如であると表現している点は、当該図の頌以下にはない趣向であり、牧人の境涯をより禅的境界位に引き付けて言い表そうとする。

人牛俱忘

撲落虚空無朕跡

虚空撲落して朕跡無し

頓忘物我絶形名

頓に物我を忘れて形名を絶す

者般消息如相委

者般の消息如し相い委せば

任向毘盧頂上行

毘盧頂上に向かいて行くことを任す

起句・承句において、一切の世界がなくなり行状の痕跡もなく、客観と主観の観念を忘れ、対象の実態と名称の位相をも断つと詠じる。前図では牛、当該図では人の存在もなくなり、本来空であったことが示される。「物我」「形名」という語を用い二元的世界を離れたことも詠じており、仏教教理を前面に打ち出す。転句・結句はこのありように従えば、仏の頭に向かつて自在に行き来するとある。結句の「毘盧頂上」は『碧巖録』に見える語だが、「忘牛存人」と同様、用語・趣向に禅的境位が強く感じられる。⁽²⁴⁾

返本還源

雲山疊疊水泱泱 雲山疊疊 水泱泱

寂爾忘言臥艸堂 寂爾として言を忘れて艸堂に臥す

噴嚏一聲開兩眼 噴嚏 一声 兩眼を開けば

依然滿面是風光 依然として滿面 是れ風光

「尋牛」の起句は山と川を「重重」という疊語で表していたが、当該図においては「雲山」を「疊疊」（雲のかかつた山は）幾重にも折り重なり、水は「泱泱」（川は）広く深く流れ行く）とする。「尋牛」の起句は一種の疊語であつたが、当該図のそれは一種の疊語で雲のかかつた山と川の広漠とした光景を言い表そうとしており、疊語の修辭法を用いている点は共通している。「尋牛」のそれは牛を探し求めるにあたりあてどのない茫漠した光景を詠じ、当該図の起句は万物の根源に立ち還つた後の自然の実相が詠出される。二句は共通する修辭を用いる一方、相反する光景が詠まれているといえよう。承句は静寂に包まれ小屋に臥すようすを詠じているが、「忘牛存人」の転句「言ふことを休めよ」の發展した境位とも受け取れる。転句・結句はくしゃみの音に目を開けると、なおも滿面に風光―本来の仏性―が存しているとするのは当該図の趣意に相応する。

入廊垂手

人天斫額望將疲 人天斫額して望む 將に疲れんとす

忍向深山尚學癡 忍んで深山に向かいて尚お癡を学ぶ

放出攀龍擒鳳手 龍を攀ぢ鳳を擒うる手を放出し

爲祥爲瑞正斯時 祥と爲り瑞と爲る 正に斯の時

「十牛図」の廊庵の頌、二種の和韻とは少しく趣向を異にする。起句・承句を照合すると、頌には、

露胸跣足入廊來 胸を露わし足を跣にして廊に入り来る

抹土塗灰笑滿腮 土を抹し灰を塗り笑い腮に満つ

とあり、大悟の人物が異形の姿で街に入るとする。石鼓夷は、

者漢親從異類來 者の漢親しく異類より来る

分明馬面與驢腮 分明にして馬面と驢腮と

と詠じ、畜生の世界から戻つて来た男の顔を馬面・驢馬の顔とする。壞衲璉のそれは、

袖裏金槌劈面來 袖裏の金槌 劈面に來たる

胡言漢語笑盈腮 胡言漢語 笑い腮に盈つ

とあり、外国語まじりの言葉話す人物を写している。頌以下、共通して異形の人物を描く。高泉も人物を詠じるが、人界・天界を遙かに望むことに疲れ、心を制し深山に向かい依然として「癡」を学ぶとしており、頌以下には見られない趣向である。癡は三毒の二つ。最終図においてそれを学ぶとすることには奇異な感もあるが、逆説的な価値の転倒を行っているところに高泉独自の表現が見られる。転句・結句について廊庵の頌は、

不用神仙真秘訣 神仙の真の秘訣を用いず

直教枯木放花開 直だ枯木をして花を放つて開かしむ

とあり、仙人が秘術を用いずに枯木に花を咲かせるとし、石鼓夷のそれは、

一揮鍊棒如風疾 鍊棒を一揮して風より疾し

萬古千門盡擊開 萬古千門 尽く擊開す

と、鉄棒を風のように二振りすれば、いかなる家の門でも壊してしまつと詠じており、いずれも人物の異能に焦点をあてる。壞納蓮のそれは、

相逢若解不相識 相い逢うて若し相い識らざることを解せば

樓閣門庭八字開 樓閣 門庭 八字に開く

とあり、『華嚴經』「入法界品」において善財童子が最後に弥勒菩薩の宮城にたどり着き、樓觀の門に自分を入れてくれるよう願つたところ、弥勒菩薩が右の指を弾くと門が開いたという一場面によつてゐる。⁽²⁵⁾一方、高泉は龍につかまり鳳をとらえる手を放り出し、その時に吉兆が現れるとする。転句「攀龍擒鳳」は『漢書』「叙伝」の「攀龍附鳳」に拠るものかと思われるが、ここは龍につかまり鳳をとらえるほどの力を發揮する手を垂れて衆生を濟う手を差し伸べると詠じ、題目の「垂手」を言い表す。人物の異能については頌、石鼓夷にも詠じられるが、高泉のそれは「龍・鳳」「祥・瑞」と吉兆を示す語を用いその人物を寿いで「十牛図」を詠じ終える。

以上高泉の「十牛図頌」を抄出して閲した。「十牛図」の趣意をあらためて詠出しており、内容は各図の趣意に沿うものであった。表現の面においては「無孔笛」「休言」などの禅語を用いて詠じ、趣向としては「忘牛存人」「人牛俱忘」に見られたように禅の境位に近づけて表現しており、禅風を直截に感得させられるものもあつた。高泉の

当該頌は後水尾院の命により賦された詩作だが、同じく来朝僧の「山一寧」、本邦の童湫周沢という五山僧の「十牛図」詠に続くものであり、院の命を機縁として当該図詠が成ったことは貴重である。検討を進めるならば「山一寧・童湫・高泉の三者の詩作を比較し、それぞれの表現・趣向の差異を見るところという方法も当然考え得る。今回はそこまでは至らず、今後の課題としたい。

おわりに

本稿は本紀要第二十一・二十二号に掲載した拙稿において触れ得なかつた「十牛図」をめぐる和歌及び詩作について検討した。二種の叢書に収められる詠歌は作者未詳であり、各叢書所収の作品を検すると、六道歌・十如号和歌などの所謂名数和歌が所収されており、本稿で検討した二種の詠歌もそうした詠作群の一つとして制作されたものとも考えられる。十牛図に基づく和歌は川瀬氏が紹介される大東急記念文庫所蔵の中世期の古写本『四部録』の十首、寛永六年版以来の『四部録』に掲載される二十首（この内八首は右記『四部録』の所収歌）、堂上歌人十人による十首そして本稿で触れた近世期の叢書類に存する各十首の二種の詠作が存する。これらは「十牛図」に直接基づいた詠作であり、その趣意を和歌によって表現したことは当該図に対する和の視点からの再生産ともいえよう。この他「十牛図」の趣意に基づき、全図和文・和歌によって著した月坡の『うしかひ草』、版本掲載歌に対しての批評・添削及び自詠を付した小澤蘆庵の文事があった。詩作においては高泉の「十牛頌」が存し、近世初期の黄檗僧によって新たに「十牛図」の趣意が表現されていた。

「十牛図」を収録する『四部録』は鎌倉時代にもたらされ、五山版以来の歴史を有するものであり、その中でも特に「十

牛図」は詩とともに挿絵が付されており、強いメッセージ性を持ち、特に近世期からは巷間にも広く受容されている。が、和歌・詩による実作は少数にとどまる。和歌においても実作は多くはなく、作者名表記がある全図に対する詠歌は堂上歌人の詠歌のみであった。分野は異なるが同じく鎌倉時代にもたらされた「瀟湘八景図」による詠作が冷泉為相以来、盛んに詠作されたことと比べると瞭然であろう。²⁶⁾「牛牛図」の注釈書は鎌倉期の痴兀大慧による『牛牛決』（応永九年成）があり、近世期には万安英種『四部録抄』（寛永十年刊）、駿陽山人『首書四部録』（元禄十一年刊）があり、当然ながら禅宗の教理において受容されてきた。「牛牛図」を特に和歌によつて創作することはそうしたところに困難さがあり、その点が風景を題材とした「瀟湘八景図」と根本的に異なる点であろう。一連の和歌による詠作は元来和歌化あるいは和歌的情趣を詠出し難い「牛牛図」をどのように表現するかという営みであったとも思われる。

なお「牛牛図」による和歌・詩は『国書総目録』などの目録類に記載のないものもあるかと思われる。以後も未出の作を調査していきたい。

注

- (1) 川瀬一馬「五山版「牛牛圖考」」(『田山方南先生華甲記念論文集』 田山方南先生華甲記念会、一九六三年)。
- (2) 川瀬氏の報告する「牛牛図」の十首の歌と版本掲載歌については、拙稿「牛牛図をめぐる和歌」寛永六年版本及び近世初期堂上歌人の歌を中心にして一(『駒澤大学佛教文學研究』第二十二号、駒澤大学佛教文學研究所、二〇一八年二月)を参照されたい。
- (3) この内一首が『六帖詠草』(文化八年刊)の雑部に掲出されている。

十牛の歌をよめる中に入麿垂手の心を

けがれたるあくたにおける露をしも玉になしてぞ月はすみける(一七七二)

蘆庵の当該歌については拙稿「月坡道印と小澤蘆庵の『十牛図』」(『駒澤大学佛教文學研究』第二十二号、二〇一九年二月)を参照されたい。

(4) 『歌書』(内閣文庫蔵) 以外は国文学研究資料館マイクログフィルムによる。

(5) 本稿の『四部録』所収の「十牛図」の本文は駒澤大学図書館所蔵『四部録』(寛永六年刊。請求記号、18884/574)による。但し「尋牛」の第二首目の(たゞ)は当該本に欠落しているため、同図書館所蔵の寛永八年刊行『四部録』(時心堂版/請求記号、1038)によった。なお小序、頌、二首の和韻の訓読に関しては右記底本に従ったが、上田閑照・柳田聖山『十牛図——自己の現象学——』(筑摩書房、一九八二年)所収の柳田氏「住鼎州梁山廓庵和尚十牛図」を参考にした。

(6) 『部類現葉和歌集』(新潟大学附属図書館佐野文庫所蔵。請求記号、3683)。

(7) 拙稿「十牛図をめぐる和歌」一五四頁。左に「牧牛」の版本掲載歌を掲出する。

日かずへて野がひのうしもてなるれば身にそふかげと成ぞ嬉しき

たづねこしまきのうね牛とりゑつゝかひかふほどに静なりけり

(8) 左に「騎牛帰家」の版本掲載歌、堂上歌人の詠歌を順に掲出する。

すみのぼる心のそらにうそぶきてたち帰ゆく峯のしら雲 (版本掲載歌)

かえりミむとを山みちの雪消て心のうしにのりてこそゆけ (同右)

うれしともうしともけふはおもはずや乗てぞかへる家路成らん (騎牛帰家・弘資(日野))

(9) 『万葉集』のむささびを詠んだ歌を左に掲出する。

むささびは木末求むとあしひきの山のさつをにあひにけるかも(巻三・二六七)

ますらをの高円山に迫めたれば里に下り来るむささび(巻六・二〇二八)

三 国山木末に住まふむささびの鳥待つごとく我待ち瘦せむ(巻七・二六七)

*日本古典文学全集『萬葉集』による。

二六七番歌は志貴皇子の歌であり、獵師に捕えられたむささびを詠む。一〇二八番歌は伴坂上郎女の歌。題詞には聖武天皇が高円山で御狩を行ったとき、小獣が都へ逃げ出し、勇士がそれを生きながらに捕え献上したとある。左注には奏上しないうちに死んだのでこの歌を奉ることはしなかつたとある。一三六七番歌は題詞に「寄獣」とあり譬喩歌である。恋の歌であり、恋人に逢えないでいる憔悴の恋心を詠む。当該歌のみ恋の思いを比喩的に詠じる。

(10) 中世期の歌集から掲出する。

おく山の木ずゑにつたふむささびのこゑもさむけく夜はふけにけり(新撰和歌六帖・第二帖・むささび・家良・五三二)

むささびのかたえおちゆく深山木に暁ふかくさゆる月かげ(同右・為家・五三二)

むささびの木ずゑにきぬるむら鳥をあはれあはれとまつやくるしき(同右・知家・五三三)

むささびの声おちかたの山本に里とほげなるむささびの声(夫木和歌抄・雑九・信実朝臣・二三〇六〇)

春日山夜ふかき杉の梢よりあまたおちくるむささびの声(同右・前中納言為兼卿・二三〇六一)

*新編国歌大観による。

『新撰和歌六帖』の五三三番歌は万葉集の二六七番歌と同じく鳥を待つむささびを詠むが、他の歌は主に深更に山から聞こえるむささびの鳴き声を詠む。中世期のむささび詠は万葉歌とは異なり、鳴くむささびを詠むものが多い。

(11) 『和漢朗詠集』新撰朗詠集』和歌文学大系47、明治書院、二〇二二年。

- (12) 注(11)に同じ。
- (13) 柳澤良『新撰朗詠集全注釈 三』新典社、二〇二一年。
- (14) 注(6)に同じ。
- (15) 版本掲載歌、古写本の歌の順に掲出する。
 手は垂て足はそらなるおとこ山枯たる枝に鳥やすむらむ
 身をおもふ身をほ心ぞくるしむるあるに任て有ぞあるべき
 うつゝとも夢ともいはじおもはねばねいらさめずをのれならまし(古写本の歌)
 (同右) (版本掲載歌)
- (16) 当該冊の所収書目を記しておく。「五燈次序 信心銘著語 十牛圖歌 東山十境詩 平心號并勅書 遺告抄 補要抄
 詩法入門 善光寺記 故事要言 俗語 博物志 續博物志 雜記」。
- (17) 注(6)に同じ。
- (18) 「十牛圖」(『隱元和尚松隱三集』所収。平久保章編『新纂校訂隱元全集 第九卷』開明書院、一九七九年)。
- (19) 拙稿「十牛図をめぐる和歌」(『駒澤大学佛敎文學研究』第二十一号)。
- (20) 高泉の事跡については松永知海「高泉禪師について」(『高泉全集IV 解説・索引篇』黄檗文化研究所『高泉全集』編纂委員会、黄檗山萬福寺文華殿、二〇二六年)に備わり、『黄檗文化人名辞典』(『思文閣出版』)に立項されている。
- (21) 『高泉全集』 語録篇(『黄檗文化研究所『高泉全集』編纂委員会、黄檗山萬福寺文華殿、二〇一四年)。
- (22) 「尋牛」の廓庵、石鼓夷、壞衲璉の転句・結句を掲出しておく。
 力盡神疲無處覓 力尽き神疲れて覓むるに処無し
 但聞楓樹晚蟬吟 但だ聞く 楓樹に晚蟬の吟ずることを(廓庵)

幾廻芳草斜陽裏 幾たびか廻る芳草斜陽の裏

一曲新豊空自吟 一曲の新豊 空しく自ら吟す(石鼓夷)

手把鼻頭同歸客 手に鼻頭を把つて同じく帰る客

水邊林下自沈吟 水辺林下 自ら沈吟す(壞衲璉)

(23) 『碧巖録』には「無孔笛」の語は四例ある。第四一則を掲出する。

趙州問「投子」。大死底人却活時如何。投子對「他道。不許夜行。投明須到。且道是什麼時節。無孔笛撞著甕拍版」。

……(大正四八・二七八下)

(24) 『碧巖録』には「毘盧頂上」の語は三例ある。第九十九則を掲出する。

國師曰。檀越踏「毘盧頂上行(須彌那畔把)手共行。猶有這箇在」。……(大正四八・二二二中)

(25) 駿陽山人の『首書四部録』(元禄十二年刊)には「樓閣門庭」の注に「……夫樓閣表仏智莊嚴、善財童子過五十余城、未

後到此樓閣、而開閉合不開、才以「弥勒一彈指、忽得豁開、広可「往見」とある。駒澤大学図書館蔵本(請求記号、

103/7) 259a。

(26) 「瀟湘八景図」の和歌における受谷については堀川貴司氏の「瀟湘八景図と和歌」(『五山文学研究 資料と論考』笠間

書院、二〇二一年)に詳述されており、鎌倉中期の冷泉為相、南北朝期の後小松院・明魏(耕雲)・飛鳥井雅世・頓阿の合作、

室町前期の冷泉為尹、飛鳥井雅縁(宋雅)、中期以降の松下正広(『松下集』八二七〜八三四)、三条西実隆には二種の詠作

があり(『雪玉集』六三三三〜六三三四(文亀元年詠)・同上六三四一〜六三四八(大永六年詠)、山科言繼、戦国大名の北畠

国永にも八景を題にした作品が存することに言及されている。実際の詠作については同氏に「三条西実隆における漢詩と和歌―瀟湘八景を中心に―」（『続五山文学研究 資料と論考』笠間書院、二〇二五年）と題した論考が備わる。岩佐美代子氏は「補説 八景歌考」（『京極派和歌の研究』改訂増補新装版、笠間書院、二〇〇七年）において京極為兼詠とされる瀟湘八景歌を取り上げ、為相・頼阿・宋雅歌との比較を試み、「作品の内部徴証からも、為兼作と見る事はごく妥当で、否定すべき要素はない。」と結論づけられる。なお稲田利徳氏の「瀟湘八景歌」（『正徹の研究』笠間書院、一九七八年）には宝徳三年（二四五二）臨濟僧景南英文の勸進による漢詩・和歌からなる詩作・歌作についての論考があり、和歌においては一条兼良、飛鳥井雅親、正徹、冷泉持為らが出詠している。

〔付記〕 引用の資料には私に清濁、句読点を付し、通行の字体に改めた個所がある。仮名遣いは底本に従った。